



新しい生活科でさらに重要視される「気付き」。様々な実践例をもとに、本連盟の3人の先生方に語っていただきました。

- ・ 高橋 透 氏 (札幌市立羊丘小学校 校長)
- ・ 三好 哲司 氏 (札幌市立北陽小学校 校長)
- ・ 磯島 年成 氏 (札幌市立真駒内曙小学校教頭)

Q：生活科の気付きについてのお考えを！

A：気付きは子ども一人一人にあり、自立の基礎に向かうもの

今回の学習指導要領解説書には、気付きのことが具体的に詳しく書かれていますね。気付きは、子ども一人一人のレベルのものです。そして、生活科の目標である自立への基礎に向いていることが大切です。活動だけでは気付きが生まれるというものではありません。教師のかかわりによって、教科としての学習に値する気付きを生み出していきます。

Q：気付きを生み出す教師のところがまえは？

A：教師が実際に体験し夢中になる！

教師のかかわり方一つで、さらに子どもが工夫して活動したり気付いたりするのに、教師が子どものしていることに気付いていないことがあります。先生のちょっとした言葉がけで、子どもの気付きが生まれるのにつながると思いますよ！気付きにつながる良い活動を見逃さないことが大切です。そのためには、教師が事前に子どもの目線になって体験してみることが必要です。頭ではわかっているでも実際にやってみないとわからないことが多いですね。そして、あらかじめどんな気付きを期待するかを明確にしておくことです。

若い時、先輩の先生から教材研究の基礎・基本を叩き込まれました。例えば6年生の図工のクランクという仕掛けで「動くおもちゃづくり」という題材が

ありましたが、当時先輩から、「教材研究とは、まず教師自身が出来ただけたくさんのおもちゃを制作してみることです。」と言われました。制作して初めておもちゃ作りの楽しさや面白さ、また難しさが分かり、子どもの気持ちに少しでも近づくことが出来るからです。教師自身がおもちゃづくりに没頭したり夢中になったりしない限り、子どもたちへ制作する楽しさや面白さを伝えることも出来ないし、どこで子どもたちがつまづくのかも予想できないからです。

このことは生活科の授業作りも同じで、新しい単元に入る前には、絶えず先々に自分の足で子どもたちの生活圏へ出向き、自分の目で確かめたり体験したり、時には、今子どもたちはどんな遊びをしているのかを調査するといった下準備を終えて、そこから初めて指導案づくりが始まるのだと思います。

Q：植物教材の単元で期待する気付きは？

A：生き物の命に関する気付き

子どもの心が植物の成長と共に育つ

「野菜パーティーをしよう」という実践がありますね。自分で育てたい野菜を決めて、育てていく活動です。この学習は、野菜を育てたり食べたりすることで、

- ・植物の変化や成長の様子に気付く
- ・世話をした植物が成長することの喜びや楽しさ気付く
- ・育てることが出来た自分のよさに気付く

ことが期待されます。

これらの気付きとともに、私が期待する気付きは、生き物の命の大切さ気付きます。以前次のようなことを聞いたことがあります。「毎日の水やりなどもしっかり出来たし、観察カードにも成長の変化の様子を詳しく書けたりしていたのにもかかわらず、少しも子どもたちの心が育っていないような気がする」

例えば、水やりした後のジョウロの後始末が悪いとか、畑の草取りは積極的ではないとか、収穫する時、乱暴な手つきで野菜を取ることが見られたりする。どうしてだろうかと……。

おそらく、野菜を客体的な“もの”として育てているのではないのでしょうか。生活科は、自分とのかかわりで活動する学習ですから、そこには“しかけ”が必要です。つまり、栽培活動を通じてねばり強く自分の力で花を咲かせることが出来たり、野菜が収穫出来たりすると同時に、子どもの心も教師の指導や支援が必要なのです。